

Descartes と懐疑論

後 藤 愛 司

Cartésianisme et Scepticisme

Aiji Goto

RESUME

Descartes commence par douter de toutes choses pour constituer sa métaphysique. Mais, dans ses textes, il soutient que son opinion diffère du scepticisme (ou pyrrhonisme). Donc, il n'est pas inutile d'étudier les rapports entre le cartésianisme et le pyrrhonisme. Dans cet essai, je veux comparer l'un avec l'autre et éclaircir les problèmes suivants.

- 1) Le but du doute méthodique.
- 2) La probabilité et l'imagination.
- 3) Le libre arbitre et l'indifférence.

1. は じ め に

Descartes の形而上学は、懐疑をもって、はじまっている。しかし、彼は、この懐疑は、いわゆる懐疑論者の懐疑とは根本的に違っていると強調している。

Non que J'imitasse pour cela les sceptiques, qui ne doutent que pour douter, et affectent d'être toujours irrésolus : car, au contraore, tout mon dessein ne tendait qu'à massurer, et a rejeter la terre mouvante et le sable, pour trouvdre le roc ou l'argile. (1)

あるいはまた、彼の懐疑過程の終りの部分で、かの「*Je pense, donc, je suis*」について次のように断ずる。

Et remarquant que cette vérité: *je pense, donc je suis*, était si ferme et si assurée, que toutes les plus extravagantes suppositions des sceptiques n'étaient pas capables de l'ébranler, je jugeai que je pouvais la recevoir, sans scrupule, pour le premier principe de la philosophie que je cherchais. (2)

以上二つの記述は Discours からとったものであるが、前者は、第三部の終りの部分、後者は第四郎の方法的懐疑の結論の部分であり、この二つの懐疑論批判にかこまれる形で、Descartes の懐疑は展開している。

したがって、Descartes が、彼の懐疑の遂行にあたって、常に懐疑論を念頭においていたことは疑いない。(3)

しかし、このような、彼の懐疑論の扱い方の中には、何かしら、彼の隠された不安、あるいは、彼の論理的弱点を我々に感じさせるものがある。それは、彼の懐疑論への評価が *ne douter que douter* とか、*extravagantes suppositions* といった、一種のコンボウ批評的言辞で

片づけられており、こうした全面否定の論述は、実は Descartes が最もおのれにとって手強い柏手を目前にした時の常套手段であり、いいかえれば、一種の防御反応の典型でもあるからである。(4)

したがって Descartes の懐疑の実相を開明するためには、一度は、懐疑論者の主張とつきあわせて Descartes の論述を検討してみることは無駄とはいえない。懐疑論者の主張とのズレをとおして Descartes 形而上学の隠された秘密が明らかにされるであろうことを、私は期待する。

2. 方法と目的

Descartes 的懐疑は、一般に、「方法的 (methodique)」という形質詞で特徴づけられる。Descartes の立場にたてば、懐疑論者は、ただ疑うためにのみ疑い、不決断、非決定に留まるものであるが、これは判断のよりどころとなる確実性を一切もたない。したがって、判断の原基となる何らかの確実性をうちたてるための懐疑は、懐疑論者のそれとは区別されることになる。

だから、Descartes の懐疑が方法的であるという時、この方法とは、何らかの目的のための方法なのであって、方法的懐疑とは、目的をもった懐疑ということになる。もちろん、この場合の目的とは Descartes のいうところの、かの「アルキメデスの一点」、*cogito ergo sum* に他ならない。

懐疑論者にとって、目的の観念は、いったいどのように把握されているのであろうか。Sextus Empiricus の「Pyrrhon 哲学の概要」第 12 章は懐疑哲学の目的をあつかっている。

La fin c'est le but de toute action ou considération, elle est elle-même sans but et c'est le dernier point où l'on tend. Nous disons jusqu'à présent que la fin du Sceptique est l'ataraxie en matière d'opinion et la modération dans ce qui est nécessaire. (5)

このテキストを表面的にみれば、Descartes の目的は「*cogito ergo sum*」であるのに対して、懐疑論者の目的は「ataraxie」であるという対比がなりたつ。しかし、よく注意してみると、懐疑論者の目的 (fin) はそれ自身においては、「sans but」であるとのべている点は注目に値する。つまり、懐疑論者の目的は、自己目的であって、それ自身は、何かそれ以外のものを目的として持たず、したがって、自らは、他の手段とはならないのである。

Descartes の場合の *cogito* は、唯一の絶対確実性として、彼の形而上学の基礎となる。つまり、形而上学の全体をその but として持っていることになる。したがって、Descartes の懐疑は、*cogito ergo sum* を目的として持ち、この *cogito, sum* は、形而上学を目的として持つという構成になる。Descartes は、その自然学からは、目的論を排除しながら、形而上学の構成においては、徹底的に目的論的である。

次に、懐疑論者の目的である ataraxie の達成に関して、Sextus は、次のようなエピソードをのべている。

Ce que l'on raconte de peintre Apelle arrive d'ordinaire au Sceptique. Peignant, dit-on, un cheval et ayant voulu reproduire par le dessin l'écume du cheval, il échoua au point de renoncer et de jeter sur le tableau l'éponge avec laquelle il enlevait les couleurs des pinceaux; et celle-ci, par contact, reproduisit l'écume du cheval. (6)

つまり、目的意識的行為は、かえって、目的を達成できないと、懐疑論者は考えているのである。したがって、atarakie といえども、通常の意味での目的ではない。むしろ結果といった方がよい。懐疑論者は、原因結果の論理をもって、目的と手段（方法）の論理に、おきかえているのである。

したがって、Descartes の懐疑の目的論的性格は、はなはだしく、懐疑論を逸脱している。

3. 否定性をめぐる問題（蓋然性）

A.) Descartes の懐疑の最も大きな特徴は、その否定性である。Discours 第四郎の冒頭の部分で、彼は次のようにのべている。

J'avais dès longtemps remarqué que, pour les moeurs, il est besoin quelquefois de suivre des opinions qu'on sait être fort incertaines, tout de même que si elles étaient indubitables, ainsi qu'il a été dit ci-dessus ; mais, parce qu'alors je désirais vaquer seulement à la recherche de la vérité, je pensai qu'il fallait que je fisse tout le contraire, et que je rejetasse, comme absolument faux, tout tout ce en quoi je pourrais imaginer le moindre doute, afin de voir s'il ne resterait point, après cela, quelque chose en ma créance, que il fût entièrement indubitable. (7)

つまり、日常生活における決断の原理（暫定的道徳の2にあたる）と対称的な意味で、学的認識においては、はんの少しでも疑わしいものは、積極的に否定するという態度である。

しかし、疑わしいものにも、様々な段階がある。完全に疑わしいもの、つまり偽なるものを否定することには、何人といえども異議はない。問題は蓋然的なものである。この蓋然的なものまでも、あえて偽なるものと同一視しようというのが、Descartes の否定である。(8)

Descartes の否定的懐疑の具体的展開を問題にすることは、今は一旦さしひかえ、懐疑論者が蓋然的真理に対して、どのような態度をとるかを見てみよう。

B.) Sextus Empricus は、アカデミア派の哲学と懐疑論との違いをのべた「概要」33章において、新アカデミア派の説に対して、次のようにのべている。

Les Nouveaux Académiciens, même s'ils disent que tout est insaisissable, diffèrent des Sceptiques peut-être même en disant que tout est insaisissable (car ils l'assurent, mais le Sceptique pense que certaines choses peuvent se produire et être comprises) et ils diffèrent de nous en toute évidence dans la distinction qu'ils font des biens et des maux. Le bien et le mal ne sont pas pour les Académiciens ce qu'ils sont pour nous, ils sont persuadés que ce qu'ils appellent le bien l'est plus vraisemblablement que le contraire, et de même pour le mal; nous ne disons pas que quelque chose est bien ou mal en pensant que c'est vraisemblable, mais nous suivons la vie sans opinion dogmatique pour ne pas être dans l'inaction. (9)

アカデミア派な、懐疑哲学と似た立場であって、すべては把握できないという主張をしている。しかし一方で、彼等は、すべてが確実に把握できなければ蓋然性にしたがって生きるしかないと考えている。懐疑派は蓋然性を認めていない。(10) この点では Descartes も又同様である。ところが、彼は、そこを一步進んで、蓋然的なものを否定してしまう。懐

疑派の方は、蓋然的であるという判断ですらも、保留しようとするものである。したがって、蓋然的なものを認めないということと、それを否定排除することとは、別のことだといわねばならない。

C.) Descartes の蓋然性についての考えを、正しく理解するためには、これを二つに分けて考える必要がある。つまり、推論の方法と認識の方法の二つである。

推論の方法としての蓋然性を、Descartes は「スコラの蓋然的三段論法 (les syllogismes probable de la scolastique) (11)」あるいは別の場所では、「弁証法」と呼んでいる。弁証法と三段論法を同一視するのは、現代の目からみれば、おかしいことだが、Descartes の時代には、「弁証家とは三段論法を中心とする伝統的論理学を研究する人々 (12)」のことであった。

この三段論法について、規則 2 においては、「少年達の精神を訓練し、また、ある種の対抗意識によって彼等の精神を向上させる (13)」ためには有効であるとして、一応教育的価値を認めながらも、「精神指導の規則」第十規則においては、次のようにのべている。

(前略) — Il convient de remarquer que les dialecticiens ne peuvent construire selon les règles un seul syllogisme dont la conclusion soit vraie, s'ils n'en possèdent déjà la matière, en d'autres termes s'ils ne connaissent pas à l'avance cette même vérité qu'ils y déduisent. D'où il ressort qu'ils ne reçoivent eux-même de cette fameuse forme aucune connaissance nouvelle; par conséquent, que la dialectique telle qu'on l'entend communément est parfaitement inutile à ceux qui désirent explorer la vérité des chose, et qu'elle ne peut servir, à l'occasion, qu'à exposer plus facilement aux autres des raisonnements déjà connus; et que, pour cette raison, il faut la transférer de la philosophie à la rhétorique. (14)

つまり、蓋然的三段論法の無効性は、それが発見の方法ではなく、説明の方法であるという点に存するのであって、純粹な推論形式としての三段論法そのものは、必然的なものだ、Descartes は考えているようである。

では、蓋然性はどこからくるのか。それは認識における蓋然性である。

彼は、「規則論」第二規則において、数論と幾何学のみが、不確実性を免れているとのべたあとで、次のようにいう。

(前略) — Il nous faut remarquer, pour apprécier plus soigneusement pourquoi il en est ainsi, que nous parvenons par une double voie à la connaissance des choses, à savoir, par l'expérience ou par la déduction. Il faut remarquer, en outre, que les expériences que nous avons des choses sont souvent trompeuses, mais que la déduction, c'est-à-dire la pure et simple inférence d'une chose à partir d'une autre, peut sans doute être manquée si on ne la vois pas, mais ne peut jamais être mal faite par un entendement doué de raison, fût-ce au plus faible degré. (15)

経験と演繹という二つの道から、演繹的方法の確実性を保証した上では、経験のみが蓋然的なもの根拠として残されることになる。

D.) 前節で、Descartes は事物の認識に到達する方法として、経験と演繹の二つをとり上げているのを見た。ところが、「規則論」第三規則では、誤ることなく事物の認識に達するような方法としては、「直観と帰納」(l'intuition et l'induction) のみが承認されている。

この二つのうち、「帰納」についていえば、これは通例「演繹」(deductio)の誤りであるとされている。(16) 事実、第三規則には帰納の説明はなく、すべてが演繹の説明のみあてられているからである。しかし、人が誤る場合には、誤るだけの理由がある。無から有は生じないのだから、誤りには、その根拠があるはずである。

この問題を解く前に、一応これを「演繹」と解した上での Descartes の論旨をのべてみよう。

「直観」とは、最も明証的で確実なる認識であり、「諸感覚の不安定な保証でも、また、虚構的な想像力の偽りの判断でもなく、純粹で注意深い精神の、われわれが理解するものについては懐疑の余地をまったく残さぬほど容易で判明な把握作用なのである。(17)」

(Par intuition j'entends, non point le témoignage instable des sens, ni le jugement trompeur de l'imagination qui opère des compositions sans valeur, mais une représentation qui est le fait de l'intelligence pure et attentive, représentation si facile et si distincte qu'il ne subsiste aucun doute sur ce que l'on y comprend) そして、これは「自分が存在していること、自分が思惟していること、三角形は三つの線だけによって限界づけられていること、球はただ一つの面で囲まれていること(18)」etc. と同じく事物の本質面の把握である。そして、「演繹」とは、直観によってもたらされた確実な原理からの連続的な推論の過程である。そして以上の二つの途が真理への確実な途であって、「これ以上多数の方法は、精神の側からは、容認されるべきではなく、他のすべての方法は、疑わしいもの、また、誤りに導くものとして、拒否されるべきである。(19)」とされる。

そうすると「帰納」ということは、この論旨からは、確実性をもたないものとして、一応除外されているかのようである。

ところが、第七規則において、Descartes は、帰納を枚挙(enumeratio)と同一視している。

枚挙の規則は、何故要請されるのであろうか。それは、単純で確実な直観からはじまる演繹が「きわめて良い推論の連鎖を通して行なわれる」結果、真理へ到達した時、「我々をそれまで誘導してきた道程の全体を套易に思い出せない」ことになり、「それ故に、記憶力の弱さを思考の一種の連続的な運動によって助けてやらなければならない」からである。つまり、演繹は、確実な記憶によって保証されてはじめて、その確実性が認められているのだが、それが、人間の記憶の不完全性の故に不可能であれば、その補助手段としての枚挙の規則が出現するのである。したがって、「直観に基づく演繹」という Descartes の方法によって保証されていない、人間の認識の一部は、この帰納もしくは枚挙という、蓋然性に基く推論によって、補強されざるをえなかったのである。

Bacon は Descartes と同じく、三段論法に対しては否定的であり、そのかわりとして、この「帰納法」を学の第一にすえているが、彼の場合、蓋然性に基く推論としての帰納法の蓋然性の根拠は、その経験性にある。根底にある経験が蓋然的であるから、帰納法が蓋然性を帯びるのである。したがって、この側面を補強するために、「消極的事例」(negative instances)とか、「特権的事例」(prerogative instances)に注目することで、うめあわせている。

ところが、Descartes の枚挙、帰納には、この経験的基盤が、できうるかぎり排除されている。彼は、これを、人間の記憶の不確実性を補うものとしてのみ、もちだしているの

である。

しかし、Descartes も、前にのべたように、人間による認識の二つの方法が「経験と演繹」であることは認めているのである。

そうであれば、最初にのべた「直観と帰納」という Descartes の誤れる言明の場合、この「帰納」という言葉に、頑初は、Bacon 的な意味をこめて、経験にもとづく認識の意味あいがあったと予想することは、あながち、馬鹿げた深読みだとは思われない。そして、この「帰納」の説明部分が消え去り、後に、「枚举」として復活することの真にある事情も、この経験にもとづく認識を否定したことの反映とみなしてもよいのではなかろうか。

4. 感覚的なものと想像力

先にのべたように、Descartes の定義による「直観」とは、重複をおそれず引用すると、「語感覚の不安定な保証でも、虚構な想像力の偽りの判断でもなく、純粹で注意深い精神の、われわれが理解するものについては懐疑の余地をまったく残さぬほど杏易で判明な把握作用」である。

この引用の前半の、否定的にのべられた部分に注目しよう。彼は「感覚」と「想像力」を排除しているのである。

A.) はじめに、感覚についてとりあげよう。

「経験」とは、感覚にもとづく認識であって、「感覚論」こそ、経験論者にいわせれば、経験論の中枢である。懐疑論者もまた、「感覚論」を認識論の中枢と考えている。Descartes の否定的懐疑においては、「感覚的なもの」は虚偽としてしりぞけられるが、懐疑論は、その真偽の認識については判断を保留するけれども、「感覚」そのものを疑ってはいない。

Sextus Empiricus における「古い方の 10 のトロボス」のうち八つまでが感覚論の立場にたっている。(1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9,) 残る二つ、No.8 と No.10 は、前者は事物の相対性の数学的証明であり、後者は、風習、法 etc. の人為的なものの相対性である。とすれば、懐疑論と感覚論は、ある意味で同一の立場だといってもよい。

懐疑論者は、感覚が誤りやすいこと、感覚が不確実であることは認める。しかし、感覚の対象が、それ自体、無であるとか、非在であるとか、否定すべきであるとかはいわない。ただ、彼等は、あくまで感覚に固執するために、感覚をとおして現われる現象の中に立ちどまって、本来の対象のあり方について判断を保留するのみである。

Ceux qui prétendent que les Sceptiques nient les apparences paraissent ne pas entendre ce que nous disons. Nous ne renversons pas les impression que reçoit passivement la représentation et qui nous mènent involontairement à l'asentiment, comme nous disions précédemment, c'est-à-dire des apparences. Chaque fois que nous recherchons si l'objet est tel qu'il apparaît, nous en accordons l'apparence, nous ne mettons pas en question l'apparence mais ce que l'on dit de l'apparence; cela est différent de mettre en question l'apparence elle-même. (20)

このような事物の現象の中に留まる立場からみると、Descartes の一挙に現象からしりぞいて本質へおもむく立場は、かえって不自然であり、独断的である。Descartes は、感覚的なものと手を切ることで、対象の本質を一元化し、「延長」としてとらえ、そこから、数学的、機械論的な自然観をとるにいたるのであるが、これは明らかに、世界の本質はと

らえられても、世界の現存はとらえられない。ここに、Descartes 形而上学の神の要請という問題がでてくる。

一方、現象の立場に留まりながらも、その対象の相対性を、理論化する方法はある。それは、現象の相対性を観念の相対性に還元して、観念学を構想する Locke の立場である。懐疑論の感覚主義は、Locke に正当な後継者を見出したというべきであろう。

B.) 次に想像力をとりあげよう。

Descartes は「第二省察」において、思惟する私の存在の確実性をのべたあとで、この「思惟するもの、言いかえれば、精神、すなわち靈魂、すなわち悟性、すなわち理性」(une chose qui pense, c'est-à-dire un esprit, un entendement ou une raison) (21)を「想像力」(imagination)から厳密に区別する。

Or il est très certain que cette notion et connaissance de moi-même, ainsi précisément prise, ne dépend point des chose dont l'existence ne m'est pas encore connue; ni par conséquent, à plus forte raison, d'aucune de celles qui sont feintes et inventées par l'imagination. (22)

私の存在の認識は、思惟そのものから結果するのであって、想像力には依存しないのである。したがって以下のように想像力は、排除されることになる。

Et ainsi, je reconnais certainement que rien de tout ce que je puis comprendre par le moyen de l'imagination n'appartient à cette connaissance que j'ai de moi-même, et qu'il est besoin de rappeler et détourner son esprit de cette façon de concevoir, afin qu'il puisse lui-même reconnaître bien distinctement sa nature. (23)

あるいはまた、物体の本性の真の認識を求める場合、有名な cire の考察において、この cire を延長に還元したあとで、次のように想像力を否定する。

Il faut donc que je tombe d'accord, que je ne saurais pas même concevoir par l'imagination ce que c'est que cette cire, et qu'il n'y a que mon entendement seul qui le conçoive; (中略) Or quelle est cette cire, qui ne peut être conçue que par l'entendement ou l'esprit? Certes c'est la même que je vois, que je touche, que j'imagine et la même que je connaissais dès le commencement. Mais ce qui est à remarquer, sa perception, ou bien l'action par laquelle on l'aperçoit, n'est point une vision, ni un attouchement, ni une imagination, et ne l'a jamais été, quoiqu'il le semblât ainsi auparavant, mais seulement une inspection de l'esprit, (24) (後略)

このように想像力は、感覚的なものと同一視されて排除される。何故、想像力は、このように、視覚や触角と同じ能力しかないのか。それは、想像力が、物的なものとの関係において認められる作用だからである。

Et même ces termes de feindre et d'imaginer m'avertissent de mon erreur; car je feindra en effet, si j'imaginais être quelque chose, puisque imaginer n'est autre chose que contempler la figure ou l'image d'une chose corporelle. (25)

想像力は、「物的なもの (chose corporelle) の image」による認識なのであって、精神の作用とは対極にある一つの認識作用である。

Sartre は、「L'imagination」において、Descartes の image が外部世界の諸対象と同じ資格における対象 (objet) であるとのべている。

Elle (image) est un objet, au même titre que les objets extérieurs. Elle est exactement la limite

de l'extériorité. (26)

Sartre は image と objet を同一視してきた西欧形而上学の伝統の一例として、Descartes の image 論をとりあげているのである。つまり、Descartes においては、image の作用は、精神の作用から切断されて、精神にとっては、その外在性の限界の位置におかれていると、いうのである。

Sartre 自身は、もちろん、imagination を精神の志向性としてとらえなおすことを意図している。

一方、Descartes の場合、image は物的世界の方へおしやられている。

さて、周知のように、Descartes は観念を三つに分類している。(生得観念、外来観念、創作観念) この場合、創作観念の材料は、外来観念であると考えれば、生得観念の他の二つの観念は、外的対象に依存する観念である。そうすると、この二つの観念は、「image としての外的対象」あるいは「物的なもの」に依存することになり、真の意味で、観念の名に値するものは、「生得観念」以外にはなくなる。

Descartes 主義の理論上の結論としての image = Objet 論は、事実上、観念の根拠の喪失をまねく。

そこで、彼の形而上学は、実存的世界の保証を、神に求める以外に結着がつかないのである。

C.) 一方、懐疑論者の立場はいかなるものであろうか。

懐疑論者は、「問題として提出されたものは、感覚の対象であるか、思惟の対象であるかどちらかである」(La proposition est sensible ou intelligible) (27)とする立場に立つ。そして、この両者の関係を「五つのトロボス」を用いることで判断保留にもっていくことができる。

たとえば、問題になっているものが、感覚の対象であったとする。その場合の判断の基準は、感覚的なものか、思惟的なものかどちらかである。もし感覚的なものであれば、この判断の基準になるものも、その確証のために、別の感覚的なものを必要とする。この連関は無限につづく。(無限背進の方法)

また、もし思惟的なものであれば、この思惟的なものにも判断の基準が必要となり、この基準も、思惟的なものか感覚的なものかどちらかである。もし、思惟的なものであれば、思惟的なものの無限背進が成立し、感覚的なものであれば、ここに循環論が成立してしまう。(28)

懐疑論者における「感覚」と「思惟」の二元論は、以上のような論理において、最終的には、のりこえられてしまう。その場合、image のような思惟と感覚の中間領域は、決して Descartes のように、感覚の方へと一元化されているわけではない。むしろ、最初の二元論的前程そのものの無効性を証明することで、imagination の領域のはらむ矛盾を避けているわけである。しかし、このやり方は、imagination の領域を正当に評価したことにはならない。懐疑論者は、すべてを「判断保留」の中に投げ込むことで、実り多かるべき問題を根こそぎにってしまったのである。

5. 演繹論理の限界

A.) 以上のように、Descartes は、蓋然性の排除ということ、感覚的なもの、および想像力の排除と同一視する。そうすると、確実なる認識の道は、直観的なものにもとづく演繹の道のみが残されることになる。この演繹的方法のモデルは、数学的方法である。方法的懷疑においても、感覚的存在の否定のあとで、「一層単純で普遍的なもの」として残されるのは、この数学的存在である。

(前略) — il faut toutefois avouer qu'il y a des choses encore plus simples et plus universelles, qui sont vraies et existantes; (中略)

De ce genre de choses est la nature corporelle en général, et son étendue; ensemble la figure des choses étendues, leur quantité ou grandeur, et leur nombre; comme aussi le lieu où elles sont, le temps qui mesure leur durée, et autre semblables.

C'est pourquoi peut-être que de là nous ne concluons pas mal, si nous disons que la physique, l'astronomie, la médecine, et toutes les autres sciences qui dépendent de la considération des choses composées, sont fort douteuses et incertaines; mais que l'arithmétique, la géométrie, et les autres sciences de cette nature, qui ne traitent que de choses fort simples et fort générales, sans se mettre beaucoup en peine si elles sont dans la nature, ou si elles n'y sont pas, contiennent quelque chose de certain et d'indubitable. (29)

ここでのべた数学的存在は、感覚的なものや想像力から切り離された、絶対確実な存在であって、直観と演繹にのみ依存している。

Descartes の本心は、この数学的存在の確実性を疑ってはいないであろう。ところが、先にのべたように、学の絶対的な原点としての cogito ergo sum を導き出すためには、一旦は、この数学的真理つまり演繹体系の確実性も疑ってみななければならない。この時、もちだされるのが、有名な「欺く神」(Dieu trompeur) の論である。

Et même comme je juge quelquefois que les autres se méprennent, même dans les choses qu'ils pensent savoir avec le plus de certitude, il se peut faire qu'il (= Dieu) ait voulu que je me trompe toutes les fois que je fais l'addition de deux et de trois, ou que je nombre les côtés d'un carré, ou que je juge de quelque chose encore plus facile, si l'on se peut imaginer rien de plus facile que cela. (30)

これは、一方では、神が論理的数学的真理を超えた存在であるとする神学的思想からきた考えであるが、他方では、論理・数理の基礎そのものが、何らかの規約性を持っており、公理となるべき論理的原点の確実性は、神によってしか保証されないという考えでもある。

懷疑論者は、その懷疑において、決して、このような欺く神の論をとらない。それは、神そのものが、超感覚的なものである以上、その感覚中心主義とあいられないからである。

しかし、公理を問題としたトロポスは存在する。それは、五つの方式の中にある「仮定によるトロポス」である。

Le quatrième mode est celui du postulat ou de la position de base: rejetés vers l'infini, les dogmatiques prennent un point de départ qu'ils ne prouvent pas, mais auquel ils jugent digne de donner l'assentiment simplement et sans démonstration. (31)

この場合、postulat は根拠を持たないのだから、それとは別の postulat でおきかえることも、基本的には、可能となる。つまり、 $2 + 2 = 4$ であることは、 $2 + 2 = 5$ であること

より必然的であるという保証は、どこにもないのである。このような、論理・数理における公理主義を、懐疑論者は、非ユークリッド幾何学以前に提出している。この立場の超克は、Descartes といえども不可能である。

そこで、Descartes の場合は、懐疑論者とは異なる立場で、この論理の規約性の問題をとらえなおし、神学的思惟の枠組みの中に、うつしかえる。つまり、神を「意志的存在」としてとらえるのである。

ところが、その場合、すぐ矛盾がおこる。すなわち、神は完全者である以上、欺くことは、不完全性であるからして、その定義とあい反する。そこで、彼は一步後退して、神のかわりに、「悪い霊」(malin génie) を想定することになる。

Je supposerai donc qu'il y a, non point un vrai Dieu, qui est la souveraine source de vérité, mais un certain mauvais génie, non moins rusé et trompeur que puissant, qui a employé toute son industrie à me tromper. (32)

私は、この mauvais génie は Dieu trompeur と同一であるとする見地をとるが、Dieu でなく génie になれば、先の問題は解消する。ここでは、この genie は、あらゆるものの否定の根拠となり、一切は懐疑の中にのみこまれ、外界のすべて、数学的存在の確実性すらもが闇の中に、ほうむりさらされてしまうのである。

しかし、ふりかえて考えてみよう。ことように、すべてが疑わしく、すべてのものが幻想に帰した状態こそ、懐疑論者の目的としての ataraxie そのものではなかったのか。だが、Descartes は、この立場には立ち止まらない。彼は、疑う私の確実性を契機として、「精神」の実在へと歩をすすめてしまうのである。これが、懐疑の最終目的としての cogito ergo sum であった。

B.) 「悪い霊」は、たしかに、cogito の確立に至るための全否定という役割を、うけもたされた仮想物である。しかし、Descartes は、はじめは、Dieu とのべたのであって、génie ではなかった。したがって、「欺く神」という概念を、Descartes は、一度はたしかに持っていたのだ。しかし、「省察四」において、彼はこれを完全に否定しきる。

Car, premièrement, je reconnais qu'il est impossible que jamais il (= Dieu) me trompe, puisqu'en toute fraude et tromperie il se rencontre quelque sorte d'imperfection. Et quoi qu'il semble que pouvoir tromper soit une marque de subtilité, ou de puissance, toutefois vouloir tromper témoigne sans doute de la faiblesse ou de la malice. Et, partant, cela ne peut se rencontrer en Dieu, (33)

すなわち、神は、欺瞞者ではありえないとすれば、神は、誤謬の根拠でもなくなる。

Descartes の懐疑の過程において、誤謬をはらむものとしての蓋然性は、感覚的なものや想像力と結びついていた。したがって、先にのべたように、直観にもとづく演繹が、感覚的なものによって誤謬におちいらないための防御装置として、「帰納あるいは枚举」が考えられていた。しかし、ここで神の完全性・非欺瞞性が証明された後においては、感覚的なものもまた神によってその存在が保証されるのだから、誤謬の原因は、他にもとめざるをえない。それは「意志」の論である。

Ensuite de quoi, me regardant de plus près, et considérant quelles sont mes erreurs (lesquelles seules témoignent qu'il y a en moi de l'imperfection), je trouve qu'elles dépendent du concours

de deux causes, à savoir, de la puissance de connaître qui est en moi, et de la puissance d'élire, ou bien de mon libre arbitre: c'est-à-dire, de mon entendement, et ensemble de ma volonté. car par l'entendement seul je n'assure ni ne nie aucune chose, mais je conçois seulement les idées des choses, que je puis assurer ou nier. Or, en le considérant ainsi précisément, on peut dire qu'il ne se trouve jamais en lui aucune erreur, pourvu qu'on prenne le mot d'erreur en sa propre signification. (34)

ここでいう「悟性」と「意志」の二つの能力のうち、人間の悟性は、人間が不完全な存在である以上限界づけられるが、意志は、神を認識するはどにも広大である。そして、誤謬は、この二つの能力の矛盾からおこる。

D'où est-ce donc que naissent mes erreurs ? C'est à savoir de cela seul que, la volonté étant beaucoup plus ample et étendue que l'entendement, je ne la contiens pas dans les mêmes limites, mais que je l'étends aussi aux choses que je n'entends pas ; auxquelles étant de soi indifférente, elle s'égaré fort aisément, choisit le mal pour le bien, ou le faux pour le vrai. Ce qui fait que je me trompe et que je pêche. (35)

つまり、意志が悟性の領域をこえて拡がるところに、誤謬の原因がある。この場合、悟性を超えた領域に対して、意志は、「非決定」(indifférente)であると、とらえられていることに注目したい。

懐疑論者にとっては、この「非決定」こそが、懐疑の目的である。彼等は、「非決定」の場、つまり「判断保留」の場にいたり、ついで、ataraxieの心境へとすすむのである。つまり、懐疑派にとって、真の自由は、いかなる言説にも影響されない地点、すなわち悟性を超えた領域、いいかえれば「非決定」の場に存する。

ところが、Descartesの意志は、一方では、誤謬への道であるが、他方では、神の認識へいたる道でもある。

Il n'y a que la seule volonté, que j'expérimente en moi être si grande, que je ne conçois point l'idée d'aucune autre plus ample et plus étendue: en sorte que c'est elle principalement qui me fait connaître que je porte l'image et la ressemblance de Dieu. (36)

人間の悟性の領域は、神とは比較にならないほど狭小であるのに、意志の領域は、神と同じほどに大きいからである。

しかし、Descartesの意志は、懐疑派の考えるような意味での「自由」を持たない。彼の「意志の自由」は、必然性に従って、決定する自由だからである。

Car, afin que je sois libre, il n'est pas nécessaire que je sois indifférent à choisir l'un ou l'autre des deux contraires; mais plutôt, d'autant plus que je penche vers l'un, soit que je connaisse évidemment que le bien et le vrai s'y rencontrent, soit que Dieu dispose ainsi l'intérieur de ma pensée, d'autant plus librement j'en fais choix et je l'embrasse. (37)

そうすると、Descartesは、懐疑論者の自由、つまり「非決定」(indifférente)の自由とは、対決せざるをえない。

De façon que cette indifférence que je sens, lorsque je ne suis point emporté vers un côté plutôt que vers un autre par le poids d'aucune raison, est le plus bas degré de la liberté, et fait plutôt paraître un défaut dans la connaissance, qu'une perfection dans la volonté. (38)

「非決定」の自由が、「認識の欠如」を意味するとすれば、Descartesのいう「自由意志」

とは、「非決定の領域」にかかわるものではなく、真なるもの、善なるものへむかう意志、つまり、「悟性的認識に従う意志」のことである。いいかえれば、彼は「自由」を「必然の認識」とみる立場に立つ。

しかし、一方で彼は、先に「欺く神」のところで論じたように、「神の意志」は、数学の確実性すら左右しうるものと考えているのである。では、神の意志は「非決定」だが、人間の意志はそうではないというのであろうか。ところが、Descartes は、人間の意志と神の意志との間に、本質的な差異を認めていないのである。彼が、主に、差異を認めるのは、悟性の力能に関してなのである。したがって Descartes の「自由意志」の論には矛盾が含まれている。彼は、「省察」では、「非決定」の自由に対して否定的であるが、後に Mesland への手紙 (1644 ou 45) において、「人間における非決定の自由」を認めているからである。

しかし、人間の意志が、神の意志に、かさなりあうほどに、大きいとする点から、短絡的に、人間に「非決定」の自由を認めるわけにはいかない。「非決定の自由」は誤謬の原因となり、そのような自由を人間にもたらしたという点で、神が、誤謬の原因になってしまうからである。

この難問を解決するためには、突極的には「神の善意」による保証しかない。つまり、誤謬の原因を神にもとめず、ただ意志と悟性との能力のへだたりにもとめなければならず、このへだたりを生み出すほどに、大いなる意志を神が与えてくれたことに感謝すべきだということである。そして、人間における「非決定」の領域は、知性のおよばない領域として措定されることになる。

いいかえれば、懐疑論者の目的であった「非決定の領域」つまり、「懐疑論者の自由」の領域は、知の境界外へ追放されてしまったのである。

※ ※ ※

以上の考察から明らかなように、Descartes の形而上学の生成過程は、懐疑論の提起していた諸問題をのりこえるための一つの試みであったと、私には思われる。したがって、Descartes の懐疑論批判が、万一、挫折していたとすれば、当然、彼の形而上学は、烏有に帰すはずである。この問題に関しては、現在のところ、私は、懐疑論者と共に、「判断を保留する」としか、いいようがない。

注

(1) Discours de la Méthode, Classiques Garnier, p.599, Adam et Tannery 版, VI p.29

(以下, DM, p.599 AT, VI 29 のように示す。)

(2) DM, p.603 AT, IV 32

(3) Descartes の懐疑は、通例、二つの時期にわけて考えられている。Gilson は、非方法的懐疑の時期と、方法的懐疑の時期の二期にわけているし、H. Lefebvre は、生きた懐疑 (le doute vital) と方法的懐疑にわけている。

この方法以前の懐疑は、Montaigne が持っていた Pyrrhonisme の思想、つまり懐疑論

と、同一であるとはいえない。むしろ、私は、方法的懐疑の成立に、Pyrrhonisme が大きな影響を与えたと考えている。

(4) それは、「省察」の objections et reponses における, Hobbes, Gassendi に対する態度をみてもわかる。

(5) Les Esquisses Pyrrhoniennes ou Hypotyposes (traduit par Geneviève Govon),

Aubier, Edition montaigne. Livre premier, ch X II, p.163,

(以下 EP, ch. X II, 25, p.163 とする)

(6) EP, Ch X II, 28, P.164

(7) DM, 4ème partie, p.602 AT, 31 ~ 32

(8) 「精神指導の規則」規則 2 をみよ。

(9) EP, Ch.XXX III, 226, p.207

(10) しかしながら、ここでとりあつかっている善悪をめぐる判断、つまり、倫理については、懐疑派といえども、蓋然性をはらむものをうけいれざるをえなかった。Livre Ier, Ch..X I は、このような critère de l'action について語っている。それは、

1) les indications de la nature

2) la nécessité de nos dispositions

3) la transmission des coutumes et des lois

4) l'enseignement des arts

の四つであり、これらの règles は,Descartes においては,かの暫定的道徳律に対応するものと考えられる。

(11) Les Règles pour la Direction de L'esprit , traduit par J. Brunschwlg, Classiques Garnier, (RD), règle II, p.81 ~ 82 AT.363

(12) 白水社版・デカルト著作集 4, 第二規則, 訳注, p.121

(13) RD, p.82 AT.363.

(14) RD, règle X, p.130 AT, 406

(15) RD, règle II, p.82 ~ 83 AT, 364 - 365

(16) RD, règle III, 注 p.87 (Le texte porte ici : *intuitas scilicet et inductio*. La suite de développement montre cependant, sans l'ombre d'un doute à notre avis, qu'il faut lire *deductio* et non pas *inductio*.)

(17) デカルト著作集 4, 大出晃, 有働勤吉共訳, p.20

(18) 同 p. 20

(19) 同 p. 22

(20) EP, Ch.X, 19, p.162

(21) Méditations (M), Classiques Garnier, II p.419 AT, IX, 21

(22) M, II, p.419 ~ 420 AT, IX, 21 ~ 22

(23) M, II. p.420 AT, IX, 22

(24) M, II, p.425 ~ 426 AT, IX, 24 ~ 25

(25) M, II, p.420 AT, IX, 22

(26) Sartre; L'imagination, p.7

(27) EP, Ch.X V, 170, p.191

- (28) EP, Ch. X V, 170 ~ 171 p.191
- (29) M, I , p.407 ~ 408 AT, IX, 15 ~ 16
- (30) M, I , p.409 AT, IX, 16
- (31) EP, Ch. X V, 168 p.190
- (32) M, I , p.412 AT, IX, 17
- (33) M, IV, p.456 AT, IX, 43
- (34) M, IV, p.459 AT, IX, 45
- (35) M, IV, p.463 AT, IX, 46
- (36) M, IV, p.460 ~ 461 AT, IX, 45
- (37) M, IV, p.461 ~ 462 AT, IX, 46
- (38) M, IV, p.462 AT, IX, 46